様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２０４３

研究課題名（和文）インド哲学における真理論と誤謬論の文献学的研究

研究課題名（英文）A textual study of classical Indian theories of truth and error

研究代表者
片岡　啓（Kataoka, Kei）

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：６０３３４２７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：紀元後９世紀後半頃のカシミールの学匠ジャヤンタが著した『論理の花房』の真理論・誤謬論を取り上げ、写本に基づいたテキストの再校訂、および、それに基づいた和訳研究・思想史研究を行い、順次、成果を誌上に公表した。先行研究の欠を補うべく、真理論・誤謬論研究の中で、これまで資料として十分に活用されてこなかった『論理の花房』について、今後の研究者が容易に利用できるよう、文献学および思想史研究の観点から、確実な資料整備と正確な文献解読を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
紀元後９００年頃のインド哲学の実像を詳細に残す資料として知られる『論理の花房』であるが、インドからの出版本は、いまだ校訂が不十分である。そこで、インドから写本を複写蒐集すると共に、写本に基づいて新たな批判校訂本を作成した。世界中の研究者の今後の利用に資するよう英文による解題および詳細なテキスト構成分析も示した。さらに、そうして作成した新たな校訂本に基づいて詳細な脚注とともに和訳を作成した。インド哲学における真理論と錯誤論について、信頼できる資料を利用可能な形で広く提供することができた。

研究成果の概要（英文）：The present textual study focuses on the classical Indian theories of truth and error as expounded in the Nyayamanjari composed by the ninth century Indian scholar Jayanta. Based on previous editions and Sanskrit manuscripts, I prepared critical editions of the relevant parts of the Nyayamanjari and published three article editions in series in university annals. On the basis of the texts thus critically edited, I translated Sanskrit texts into Japanese and published them in university annals in series.

研究分野：インド哲学，インド仏教学

キーワード：真理論　錯誤論　ジャヤンタ　誤謬論

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

(1) 本研究は、論理学者ジャヤンタ（紀元後９世紀後半頃）の著作『論理の花房』を通して、真理論の思想史的発展を探ろうとするものである。従来の比較哲学的なアプローチにたいして、文献学・思想史研究の観点から、真理論の歴史的発展を見直そうとする。同時に、真理論の裏面である誤謬論についても、後代の発展を、ジャヤンタの著作に探る。

(2) この誤謬論については、Schmithausen (1965)による包括的なマンダナミシュラ（後 700 年頃）の誤謬論研究以降、研究は皆無に近い。マンダナミシュラの『誤謬論』は詩節で著され、簡潔で内容把握が難しい。

(3) ジャヤンタはマンダナミシュラに基づきながら、散文で詳説する。『論理の花房』は誤謬論研究の資料として価値が高いものである。真理論・誤謬論は、インド哲学史では、単なる思弁を超え、宗教間論争の射程も有する。

(4) インド思想史再構築の重要資料として知られる『論理の花房』を緻密に読み解くことで、クマーリラからジャヤンタに至る論争の展開を明らかにする。

## ２．研究の目的

(1) 紀元後９世紀後半頃のカシミールの論理学者ジャヤンタが著した『論理の花房』の真理論・誤謬論を取り上げ、写本に基づいたテキストの再校訂、および、それに基づいた和訳研究、思想史研究を行う。

(2) これまでのインド哲学研究において、真理論・誤謬論は、主に比較思想の観点からなされてきたが、本研究では、その欠を補うべく、文献学および思想史研究の観点から行う。

(3) 真理論・誤謬論研究の中で、これまで資料として十分に活用されてこなかった『論理の花房』を、今後の研究者が容易に利用できるよう、確実な資料整備と、正確な文献解読を行う。

(4) これまで利用されてこなかった重要な写本の活用による批判再校訂、および、先行する思想家との比較を踏まえた思想史研究が本研究の特色である。

## ３．研究の方法

(1) ４年間の研究期間において、真理論、誤謬論前半、誤謬論後半という順序で、テキスト校訂と訳注研究の作業を順次行った。

(2) いずれについても作業の手順としては、テキスト校訂、同時並行での粗訳作成、詳細な脚注付加と和訳の洗練、という順序で行った。

(3) まず初年度に『論理の花房』の重要写本をインドから入手することができた。

(4) また、作業の進行やチェックにあたって、国内外の研究会を利用した。すなわち、国内では九州大学での研究会を開催し、国外ではタイ国マヒドン大学，米国イェール大学で校訂テクスト暫定版の検討会を行った。

(5) 最終年度はヴァンクーヴァーのブリティッシュ・コロンビア大学で開催された国際サンスクリット学界での学会発表を行った。

(6) 基礎資料を踏まえた独立した論文については、別途、学会での発表を行い、雑誌への投稿を行うことができた。

## ４．研究成果

(1) ジャヤンタの真理論・錯誤論を研究するため、インドから蒐集した写本（複写）に基づいて校訂作業を進めた。2015 年度は、真理論の箇所について、2 本の刊本と 2 本の写本に基づいて校訂作業を進めた。その成果については、『東洋文化研究所紀要』169 号（2016 年 3 月、1-60 頁）に掲載の A Critical Edition of the Pramanya Section of Bhatta Jayanta's Nyayamanjari と題した論文にまとめた。論文の中では、英文の Introduction において、『真理の花房』中における真理論の位置づけを明らかにすると共に、ジャヤンタの真理論箇所のテクスト構成の分析を行った。その後に、インド文字での校訂テクストを、詳細な異読表、平行句情報などとともに記している。

(2)　京都大学のソームデーヴ・ヴァースデーヴァ博士、および、JSPS 特別研究員の斉藤茜博士と共に、錯誤論研究会を九州大学にて開催、ジャヤンタの錯誤論、および、それに先行するマンダナ・ミシュラの錯誤論をテクストと共に検討し、下訳を作成した。

(3)　2015 年 11 月に信州大学で行われた Comparative Philosophy of Perception という国際シンポジウムにおいて A Brief Sketch of Indian Theories of Error (vibhrama)と題した英語での発表を行い、錯誤論の全体像について報告を行った。

(4) 2016 年 2 月にタイ国マヒドン大学主催で行われた Winter Sanskrit Retreat において、報告者が準備したジャヤンタの錯誤論箇所の校訂テクストを読書会の資料として取り上げ、世界各国から集まった若手研究者と共に読み進め、内容を検討した。

(5) 2016 年度，当初の計画通り、ジャヤンタ著『論理の花房』の該当箇所前半部を写本に基づき校訂し、出版することができた。成果は、『東洋文化研究所紀要』171 号に掲載された（2017 年 3 月）。また、インドより新たに入手した写本（先行出版では未参照）をあわせて用いることで、校訂をより精確なものとすることができた。

(6) さらに、九州大学において「錯誤論研究会」を開催し、校訂本および和訳を、石村克・中須賀美幸ほかの若手研究者と共に検討する機会を持つことができた（2016 年 8 月）。また、錯

誤論と密接に関係する意味論について、先行研究の見解を正す論文を『南アジア古典学』１１号に掲載した（2016 年 7 月）。
(7) また，ジャヤンタに後続する著者として重要なスチャリタミシュラの注釈について、自身が校訂した原典に基づいて和訳を『哲学年報』76 号に掲載した。また、著者であるジャヤンタの小品である『論理の蕾』について、著者問題を再考する論文を『インド論理学研究』９号に掲載した。
(8) 2016 年 11 月には，ケンブリッジ大学において，ジャヤンタの重要なソースとなっているクマーリラの『頌評釈』の研究会に参加した。2017 年 2 月には、インド・ポンディシェリにあるフランス極東学院において、ジャヤンタの錯誤論のソースとなるマンダナミシュラの『梵の論証』の研究会に参加した。
(9) 2017 年度、当初の目標通り、紀元後９世紀頃のインド・カシミールの学匠ジャヤンタによって著わされた論理学書『論理の花房』の「唯識批判章」に含まれる「錯誤論」の箇所について、先行刊本２本、ジャンムー・カシミール州のシャーラダー文字写本１本、ケーララ州のマラヤーラム文字写本２本、その他のデーヴァナーガリー写本２本に基づきながら、サンスクリット語原典の新たな批判校訂本を作成、英語の解題と共に出版することができた。成果は、2018 年 3 月刊行の『東洋文化研究所紀要』173 号に掲載されている。本章について、従来、諸写本の異読を完全に記録した校訂本はない。錯誤論を扱う研究者に信頼できる一次資料を提供するものである。
(10) また、2016 年度に刊行した同書の別章（同じく錯誤論を扱う）の批判校訂本について、対応する和訳を作成、詳細なテクスト構成分析と豊富な脚注と共に出版した。成果は、「ジャヤンタの錯誤論」として、『哲学年報』（九州大学）77 号に掲載された。従来、インド哲学における錯誤論を扱った包括的な和訳研究は見当たらず、今後、錯誤論を扱うインド哲学研究者が先ず最初に参照する二次資料となることが予想される。錯誤論は、ニヤーヤ論理学・聖典解釈学のみならず、仏教やヴェーダーンタ神学においても重要な論題である。一分野を超えた貢献となるはずである。
(11) 校訂本については、イェール大学での国際研究集会で各国からの参加者と読み合わせ、解釈その他の再検討を行った。ウィーン大学ではジャヤンタの関連箇所の他、密接に関連する学匠達のテクスト研究会に参加、ジャヤンタの思想における錯誤論の位置付けについて再検討を図った。本章でも扱われる仏教の認識論・錯誤論については、『南アジア古典学』12 号および『インド論理学研究』10 号に邦文で成果を発表しえた。仏教において錯誤の一種として扱われる言語認識については『印度学仏教学研究』に別途論文を掲載した。
(12) 2018 年度，当初の計画に沿って、『論理の花房』「唯識批判章」に含まれる「錯誤論」の箇所について、2017 年度に筆者が出版した批判校訂本に基づいて和訳を作成し、詳細なテクスト構成分析と豊富な脚注と共に出版した。成果は、「唯識の錯誤説に対する Jayanta の批判」と題して、2019 年 3 月刊行の『哲学年報』78 号に掲載されている。仏教の錯誤論に対するバラモン教側からの批判に関して相当量の資料を提供することができた。
(13) また、同章を含むジャヤンタの解脱論箇所について、2018 年 7 月にカナダ・ヴァンクーヴァーで開催された国際サンスクリット学界にて、Jayanta on Kumarila's view of liberation と題した発表を英語で行った。錯誤論が展開される背景となる解脱論に関して、クマーリラとジャヤンタという二人のバラモン教側の学匠たちの態度を明らかにした。
(14) さらに、仏教の錯誤論において鍵概念となる「形象」という考え方を取り上げた発表を準備し、2018 年 9 月に開催された日本印度学仏教学会学術大会にて発表し、その成果を『印度学仏教学研究』67-1 号誌上に「有形象認識論の形象は非真実か？」と題した論文として掲載、ジャヤンタが批判対象とする仏教側の錯誤論の背景を明らかにすることができた。
(15) また、錯誤論と密接にかかわる仏教の概念論についても成果をまとめ、『南アジア古典学』13 号、および、『東洋文化研究所紀要』175 号誌上にて成果を論文として発表した。
(16) 4 年間の研究期間全体において、当初の予定通り、ジャヤンタの真理論・錯誤論に関して写本に基づく批判校訂本を作成し、そうして作成された新たな校訂本に基づきながら和訳を作成、いずれも『東洋文化研究所紀要』『哲学年報』に論文成果として、順次、公表することができた。また、関連するトピックについて相当数の個別論文を国内誌・国際誌に掲載することができた。

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１８　件）
① Kei Kataoka, A Critical Edition of Kasika ad Slokavarttika apoha vv. 95-176, 東洋文化研究所紀要，査読無，175 号，2019，1-60.
② 片岡啓, 唯識の錯誤説に対する Jayanta の批判―Nyayamanjari「認識一元論批判」和訳（続）―，哲学年報，査読無，78 号，2019，7-46.
③ 片岡啓，有形象認識論の形象は非真実か？，印度学仏教学研究，査読有，67-1 号，2018，147-154.

④ 片岡啓，ディグナーガのアポーハ論，南アジア古典学，査読有，13 号，2018，207-243.
⑤ Kei Kataoka, A Critical Edition of the Latter Half of the Vijnanadvaitavada Section of the Nyayamanjari: Bhatta Jayanta on Asatkhyati and Atmakhyati，東洋文化研究所紀要，査読無，173 号，2018，1-57.
⑥ 片岡啓，ジャヤンタの錯誤論――Nyayamanjari 和訳――，査読無，哲学年報，77 号，2018，1-69.
⑦ 片岡啓，ディグナーガの転義批判，印度学仏教学研究，査読有，66-1 号，2017，30-36.
⑧ 片岡啓，パラフレーズによる abhutaparikalpa の構造分析，インド論理学研究，査読無，10 号，2017，25-41.
⑨ 片岡啓，自己認識の生成・背景・変質，南アジア古典学，査読有，12 号，2017，191-214.
⑩ Kei Kataoka, A Critical Edition of the Khyati Section of the Nyayamanjari: Bhatta Jayanta on Akhyati and Viparitakhyati，東洋文化研究所紀要，査読無，171 号，2017，1-76.
⑪ 片岡啓，スチャリタミシュラのアポーハ論批判 ―Kasika ad Slokavarttika apoha v. 1 後主張の和訳―，哲学年報，査読無，76 号，2017，33-82.
⑫ 片岡啓，Nyayakalika 結語再考，インド論理学研究，査読無，9 号，2016，45-61.
⑬ 片岡啓，ディグナーガによる不排除と包摂の意味論，印度学仏教学研究，65-1 号，2016，130-137.
⑭ 片岡啓，tadvat と apohavat――限定関係をめぐるディグナーガとクマーリラの一議論――，南アジア古典学，査読有，11 号，2016，49-74.
⑮ Kei Kataoka, A Critical Edition of the Pramanya Section of Bhatta Jayanta's Nyayamanjari，東洋文化研究所紀要，査読無，169 号，2016，1-60.
⑯ 片岡啓，スチャリタミシュラのアポーハ論理解 ―Kasika ad Slokavarttika apoha v. 1 前主張の和訳―，哲学年報，査読無，75 号，2016，55-107.
⑰ Kei Kataoka, Horns in Dignaga's Theory of Apoha, Journal of Indian Philosophy, 査読有，Vol. 44-5, 2016, 867-882, DOI:10.1007/s10781-015-9284-5.
⑱ 片岡啓，アポーハの遍充把握――ディグナーガとクマーリラ――，印度学仏教学研究，64-1 号，2015，75--81.

〔学会発表〕（計 8 件）

① 片岡啓，有形象認識論の形象は非真実か？，日本印度学仏教学会，東洋大学，2018 年 9 月.
② Kei Kataoka, Jayanta on Kumarila's view of liberation, 17th World Sanskrit Conference, British Colombia, 2018 年 7 月.
③ Kei Kataoka, Ratnakarasanti on Prakasa, International Association of Buddhist Studies, University of Toronto, 2017 年 8 月.
④ 片岡啓，ディグナーガの転義批判，日本印度学仏教学会，花園大学，2017 年 9 月.
⑤ 片岡 啓，ディグナーガによる不排除と包摂の意味論，日本印度学仏教学会，東京大学，2016 年 9 月.
⑥ 片岡 啓，tadvat と apohavat――限定関係をめぐるディグナーガとクマーリラの一議論――，インド思想史学会，京都大学，2015 年 12 月.
⑦ Kei Kataoka, A Brief Sketch of Indian Theories of Error (vibhrama), Comparative Philosophy of Perception, 信州大学，2015 年 11 月.
⑧ 片岡 啓，アポーハの遍充把握―ディグナーガとクマーリラ―，日本印度学仏教学会，高野山大学，2015 年 9 月.

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://kaula.web.fc2.com/WorksJ.html

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。